

# 現在Twitterの人生相談でフォロワー22万人超 カゲキに歩んできた 人生を大いに語る

## ① 志茂田景樹インタビュー



しもだ・かげき●1940年3月25日  
生まれ。静岡県出身。大学卒業後  
は20種類以上の職を転々とする。  
1976年『やっこ探偵』で小説現  
代新人賞を、1980年『黄色い牙』  
で直木賞を受賞。執筆活動のほか  
奇抜なファッションセンスが注目さ  
れ、テレビなどでも活躍するようにな  
る。1999年より「よい子に読み聞  
かせ隊」を結成。最近Twitterで  
の人生相談が話題となり、フォロワ  
ー数が22万人を超える人気となる。

▲全国の悩める子羊を、志茂田氏の人差し指が救う。

トップバッターは直木賞作家にして、80年代からタイツ姿で世間をあつと言わせた志茂田景樹さん！現在はTwitterを使った人生相談が大人気で、フォロワー数は22万人超。常に輝き続ける志茂田氏に、悩み多き現代人への生き方のヒントを聞いてみよう。

志茂田さんは現在、「よい子に読み聞かせ隊」を結成して全国に行つてらっしゃいますが、読み聞かせをしようと思つたきっかけは？

「96年に『KIBABOOK』という出版社を立ち上げて、全国の書店でサイン会を始めたんです。集まってくる人はたいていがヤジ馬で笑、髪を染めてタイツを穿いた変な人がいるっていう感じで、サイン会が始まると帰る人が多かったです。ある日、福岡の本屋さんでサイン会を開いた時に、僕が子ども向けの本を出版していた訳ではないのに、いつになく子どもが多かったです。本屋さんに絵本を持ってきてもらって2冊ほど読み聞かせをしてみたんです。「三匹のこぶた」と新

美南吉先生の「赤いろうそく」を読んだら、ザワザワしていた会場があつという間に静かになって、大人も子どもも帰らずにのめり込んでいる。その時、絵本の読み聞かせって、奥行きが深いんじゃないかとビックリしました。それ以降、読み聞かせをするようになって、1年足らずの間に仲間が集まってきたので、「読み聞かせ隊」を結成しました」

「その前は20年以上にわたって小説を書いてらっしゃいましたが、子どもの頃から小説は好きだったんですか？」

「実は、本を一番たくさん読んだのは20代後半ですね。当時は保険の調査員をしていて、地方に行くことが多かったから、夜行列車に乗った時に手当たり次第に読んでいました。その時に、色々な文芸誌の新人賞の作品を読んだんだけど、「あれ？これだったら、僕にも書けるな」と思つて(笑)。実際に書き始めたのは29歳の時です。虫垂炎をこじらせて入院した時、その病院がヤブ医者でないからと院できるのベッドが埋まらないうからどうしても僕を退院させようとして(笑)。(笑)。病室で書いた作品が、二次審査ま

でいったから、続けられなくなるとかなるんじゃないかと思つて、書き続けました」

「その間、お仕事は？」

「色々な仕事に就いたけど、実は「TVガイド」で取材記者やリポーターの仕事をしてたこともあるんですよ。「スター小説」というコーナーで、西城秀樹さんや森昌子さんの生い立ちを綴る小説を書いていたこともありましたが、結局、新人賞を取るのに7年かかったけど、苦勞した分、その後もヒットを出せるようになりました。それから4年後です」

志茂田さんといえば、タイツを穿いた直木賞作家ということでも有名になりましたが、タイツを穿いたきっかけは何ですか？

「ニューヨークに短期留学していた友人が、お土産をくれたんです。その時は都ホテルに缶詰めになっていて、部屋に帰って中身を見たら、全く同じタイツが2足入っていた。それは、当時ニューヨークで流行していたタイツで、足首から上に向かってマリリン・モンローの顔がいくつもプリントしてあって(笑)。「女

性用だし、これは穿けないな」と思つて放つておいたんだけど、気分転換にバスルームに入ってから出てきたら、なぜかそのタイツが気になったんです。試しに穿いて、鏡に映してみたら「あれ？結構、カッコいいな」と思つて、せっかくなので、ジーンズもハサミで短く切つたタイツの上から穿いてみたところ、これまたカッコいい(笑)。そこで、お気に入りのTシャツと合わせて外を歩くことにしたんです。ホテルを出て、桜田通りを歩いたら、途中ですれ違う人がみんなギョツとした表情をして「あれ？やつぱり、おかしいと思われてるんだろな」と思っている時に44、45歳ぐらいの3人組の紳士とすれ違った。その人達も、僕を見た瞬間は、ギョツとした表情になったんだけど、さすがに紳士だからすぐに何気ない顔に戻ったんです。だけど「アイツら、絶対に立ち止まって、僕の方を見てるんじゃないか」と思つて振り返ったら、やっぱり3人も僕の方を見てヒソヒソ話をしてた(笑)。僕も落ち込んで、ホテルに帰って普通の格好に戻るかと思つたけど、既にかな

# ライオンブザン ステイバル

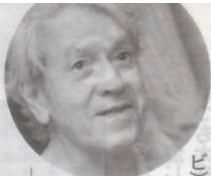
あちゃんに比べると、とかく元気がないと思われがちなおじいちゃん。しかし、世の中には爺ちゃんは爺ちゃんでも「Gちゃん」(グレートな爺ちゃん)がたくさんいるのだ。そんなパワフルな人々を一挙に紹介!

現在82歳！  
@kazuo1930さんのTwitter拝見

72歳の志茂田景樹さんよりもさらに10歳も年上！ 80代以上の人もTwitterを楽しんでいる昨今、Twitter歴2年の@kazuo1930さんツイートの一部を紹介するぞ。ほっこりする内容が満載だ。

- kazuo @kazuo1930**  
ノーベル賞に招待されなかった。来年は受賞するかも、長生きして待ってよう。
- kazuo @kazuo1930**  
今日は麻雀、4人合わせて329歳。
- kazuo @kazuo1930**  
産医師異国に向かう産後厄なくみ文は読むに虫さんごん間に泣く。「この暗号を解いてください」
- kazuo @kazuo1930**  
回答は、円周率の記憶方法です、参考になれば幸い。
- kazuo @kazuo1930**  
国勢調査次回にも提出できるかな？

ちなみに、お孫さんの@mashimiさんに、どんなお爺ちゃんか聞いてみたところ、知る事が好きで行動派。返信のやり方等は自分で勉強したとのこと。アイコンは20代の頃のkazuoさんの写真で、kazuoさんは「若い友達ができたらいいな〜」と笑いながら、お孫さんとセレクトしたそうだ。



「その後の反響はいかがでしたか？」

「歩いていたので、戻るにしても長い距離。まさに、進んでも地獄、戻っても地獄の状態。『どうせ地獄なら進もう』と開き直って歩きました。交差点で信号待ちをしている時も、交差点の向こうにいる人にじっと見られたりしながら。でも、そういう視線がだんだんと気持ちよくなってきいんです。普段はバランスのとれているSとMの感覚が大きくMに傾いたという感じ。白目で見られるのも心地いい。だから、自然とそういう成り行きになっていきましたね」

「ホテルでタイツを穿いていなかったら、得られない経験ですね！その後、テレビにも出られて、相当、話題になりましたよ」

「タイツを穿いていることに、一番最初に注目してくれたのは『週刊文春』。密着取材をさせて欲しいと言われて、各種のパーティーに行っている時の服装の写真を集めて、グラビアを載せてくれたの。それをテレビ番組のスタッフが見てくれたようで、出演のオファーが来るようになりました。バラエティ番組で一番最初にオファーがあったのは『天才・たけしの元気が出るテレビ!!』(日本テレビ)。その後、所ジョージさんやとんねるずの番組に呼ばれるようになって、笑っているようにもなりました」

「重みのある言葉ですね。志茂田さんといえば、半年くらい前からTwitterでの人生相談が話題となっていますが、

### 志茂田景樹さんのタイツ浸透度グラフ

志茂田景樹さんのタイツ姿が、世間になじんでいく様子をグラフに表してみました！

タイツのこと、知っているのでも、知らないのでも、タイツ浸透度

- 2010年10月10日
- 2011年10月10日
- 2012年10月10日
- 2013年10月10日
- 2014年10月10日
- 2015年10月10日

# 「どんなことでも、一貫して10年やれば哲学になるんだ」

「Twitterはいつ頃から？」

「始めたのは、2010年の4月で、最初は僕も『六本木ヒルズなう』っていう感じで打ってたの(笑)。内容も告知的なことが多かったから、フォロワーさんも数えるほどでした。でも、数ヶ月がたった頃から『これだとつまらないな』と思いはじめ、漠然と考えることを書いてみようと思ったんです。人間は、自分が漠然と思っていたことを短い文章で書かれると『そうだ、そうだ』と思う傾向があって、それ以来フォロワーさんの数が急上昇しました。2010年の秋に1万人を超えて、小爆発を繰り返しながら、今年の5月には13万人を超えました」

「すさまじい数！ フォロワーさんからのお悩み相談は一日にどのくらい届きますか？」

「答える質問は一日に10件から20件程度、お悩み相談はその10倍は届きますね。長い文章のものであっても返答つきのリツイートで返すから、相談内容の部分は自分で内容を変えないように要約したりしながら…」

「志茂田さんが、自ら要約するんですか？」

「はい、口頭で入るものを口頭で要約して、Twitterでリライトしていた時の癖だね。たまに『これには、まだ直しますから(笑)』」

「悩み相談の傾向はありますか？」

「重い内容が多いねえ。心のリズムを崩している人が増えてます。最近の人は『そんなに深刻にならなくてもいいんじゃないの』と思うほど、過敏で傷つきやすい。20年くらい前の世代の人は、ボロボロに傷ついても立ち直りが早かったのだから、今の人は遅いんですよ」

「全体的に何か弱くなっているというか、コンプレックスを抱えている人が多い気がしますね」

「今は、みんな仲良くして、自分だけ突出しないでおこうと思っている人が多くて、そういう人って傷つきやすいんです。嫌なことは相手に言わないようにしようと思って自分の中に取っちゃう。時代の雰囲気、染まっちゃってますね。やっぱり、閉塞感が抜ければ、気持ちも自然と変わります。今は明るさがない時代、代明きさってというのは豊かさとは関係ありません。時代の雰囲気が明るければ、みんな明るくなる。自分を貫くことは難しいかもしれないけど、どんなことでもいから自分ができていることを続けること、やめたらダメ。忍耐を振り絞って継続させた方が絶対得です。5、10年経つたら分かるけど、状況は変わってくるよ。継続していることの中に潜んでいる志が、実を結ぶんじゃないかと思えます」



「みんな～元気?」「イエーイ!」「お爺ちゃん達、元気?」「イエーイ!」「お兄ちゃん達、元気?」「イエーイ!」「おばあちゃん達、元気?」「イエーイ!」「おじいちゃん達、元気?」「ウォ~~~~~!!」…おば

## 逆 傷なめクラブ

今回は特別に、いつもは読者の皆さんからのお悩み相談に答えている光浦靖子さんからの、「重い悩み」に答えてもらったぞ!



人並みに笑うことは笑うのですが、笑うという行為が持続しません。本番中も、カメラで顔をぬかれたときには、もう笑いは止み、真顔になっています。いつも笑ってない、とクレームも入るほどです。人並み、いや、それ以上に面白いことは好きなのですが、

光浦さんは、敏感なんだと思います。だから、ここで笑いを止めても大丈夫だと思ったら、すぐに笑わなくなってしまう。そもそも、笑うという行為にはサービス精神が必要なので、少しでも笑おうとしている光浦さんは、サービス精神が旺盛なんだと思います。サービス精神はあるけど、敏感だから笑いを止めてしまうのだと思います。ただ、余韻は大事ですし、余韻がないという表情は画面からも伝わってきますので、もう映らないと思っても、いつもより2秒だけ長く笑ってください。それにしても、光浦さんって、悩み相談をやっているわりには悩みが多そうだけど、大丈夫?

「暗くな心に一筋の光を当てようとしている光景。」



▲カラフルな衣装の数々。テレビのカラーパー並み。

取材・文・構成 / やきそばかおる  
撮影 / 田子芙蓉 (P10~11・13)  
中越春樹 (P12)  
イラスト / 澁谷研